

春野ルハ短編集 第一集

春野 ルハ



悲愴パン屋の死



緑地の幽霊



墨染めの衣



ホルマリン池から
出てきた女

目次

一、 悲愴パン屋の死

1

二、 緑地の幽霊

15

三、 墨染の衣

45

四、 ホルマリン池から出てきた女

77

悲愴パン屋の死

パン屋が自殺した。まだ28才の若さだ。可哀想にまだ独身だった。

「春野ルハさん、幽霊の出る話があります。ほんの少し前のことです。

今年の正月明けのことです、話をきいていただけますか」

女子中学生から突然電話があった。話を聞くことにした。

「じいちゃんは散歩の途中、新しく開店したてのパン屋さんの前を通りかかったのです。じいちゃんは散歩しながら町のあちこちをのぞいて回るのがとても好きなんです」

「ふーん、いいことですね、好奇心があることはとてもいいことですよ」

「そのパン屋さんは店も小じんまりしていてきれいだし、若い女性の店員さんと落ち着いた中年の女の人がキビキビと働いていてね、それに立派な新品のパン焼機が外から見えるんだ、なんだか赤銅色していてね、清潔感があつてね、とても高価な機械に見えるんだよ、小麦粉は全て自然食品採用、玉子や牛乳が入っているもの、これも自然のもので、アレルギーの人にはやさしいパンです、と書いてあつたとじいちゃんは、ばんご

はんの時云うんです、お母さんが一度行ってみようかな、市場の横ですか、と聞くとじいちゃんは、そうだよ、市場を西の方へ抜けた左側だよ、でも高いんでしょ、高2の姉がいうとじいちゃんは、そうでもないようだがな、といってその時はそれでパン屋さんの話は終わったのです。

そして、それからじいちゃんは2度ばかり散歩の途中その店に寄ってパンを買ってきたのです。じいちゃんはいつも5枚切りの食パンと菓子パンを買ってくるのです」

「ふーん、おじいちゃんは楽しい人ですね」

「じいちゃんのお母さんは神戸の人で、いつもハイカラ、ハイカラといって洋風だといっていました」

「それからどうなったのですか」

「今度は、お母さんが2度程そのパン屋さんでパンを買ってきて、日曜の朝、弟や父も交えてみんなで食べました。主に食パンです」

「おいしかったのでしょうか」

「じいちゃんと父さんは、あつさりしているけどおいしいね、昔食べたことのあるパンの香りが懐かしいと思ったといいました、私と姉は、ちよつとサラサラとしていてあま

り味がないといいました。弟は、ぼくはなんでもおいしいといいました。その時はそれだけでした」

「ふーん、それからどうなったのかしら」

「お母さんは、何度かその店へ行く内に店主とちよつと親しくなつて、『若いのに偉いねえ、がんばつてね』というと、若い店主は、『このあたりの人にはぼくが作るパンの本当の良さをなかなか分かつてくれないのです』といったことをまた夕食の時お母さんが話題にしました。するとじいちゃんや、『そういえばこの頃パンの種類や店に置いてあるパンの量が前より少ないと思うんだがねー』といいました。『それにしばらく前から2人の店員さんを見なくなつたねえ』といいました」

「ふんふん、なんだか心配だねえ」

お母さんは、『経営が苦しくなつてきたのかしら、この頃一人でしゃがんでうづくまつているような姿を見かけたし、なんだか寂しそうな顔つきをしているように思つたんだけど気のせいかなと思つたりして・・・』

「ますます心配だねえ」「それからしばらくして年の瀬の最後の土曜日、父の弟のおじさん一家が4人そろつて広島から遊びに来て泊つたのです。正月はちよつと予定が出来